

「大地震の記」について

—秋田師範学校生徒佐々木金一郎による大正三年「秋田仙北地震」（強首地震）の記録—

畑 中 康 博*

はじめに

平成二十三年（二〇一一）三月十一日、宮城県牡鹿半島の東南東沖海底で日本観測史上最大マグニチュード九・〇の巨大地震が発生した。この地震に伴って発生した大津波と、地震と津波によって損傷した東京電力福島第一原子力発電所の事故により、被害は甚大なものになった。マスコミ各社は地震発生直後からこの地震を「東日本大震災」「東北関東大震災」「東北・関東大震災」「三・一一大震災」「東北沖大地震」「東北・関東大震災」「宮城・茨城沖大地震」「東日本大震災」「東日本巨大地震」と呼称し、生々しい現場映像や専門家の解説を交えて報道し続けた。しかし、地震発生から時間が経過するにつれ、復旧・復興に立ち上がる人々の人間模様が報じられるようになり、震災を機に人々の絆が見直されるようになった。

幸いにも秋田県はこの地震における被害は軽微であったが、歴史をひもとくと、本県はこれまでに何度も巨大地震に見舞われ、その度に多数の犠牲者を出してきたことが分かる。そのうちのひとつが、大正三年（一九一四）三月十五日に発生した「秋田仙北地震」である。この地震のマグニチュードは七・一、大仙市大曲から刈和野付近の震度は六、秋田市の震度は五、更に青森から新潟、宮城県石巻市にかけて震度四を記録した比較的規模の大きな地震だった。県内の被害状況は、死者九四名、負傷者三二四名。家屋被害は全壊六四〇戸、半壊五七五戸、

焼失三戸だった。また地震の被害は震源地である仙北郡が多く、死者八六名、負傷者二七八名、全壊五八〇戸、半壊四八三戸、焼失三戸だった。このように震源地付近の被害が大きかったために「秋田仙北地震」は震源地付近の地名をとって「強首地震」とも言われる。

「秋田仙北地震」を文献から調べることは、これまでもよく行われてきており、最もよく利用されるのが、同時代の『秋田魁新報』（以下『新報』と略す）である。最近、水田敏彦が『新報』に掲載された「秋田仙北地震」関連の記事を一覧にしており、調査の際参考になる。⁽¹⁾ また『秋田仙北地震』の被害状況については、発生九日後の三月二十四日に秋田県が出した『秋田県震災の状況』に詳しい。⁽²⁾ 加えて「秋田仙北地震」を最初に研究した人物は今村明恒で、地震直後から震源地付近で調査を行い、その結果を「大正三年秋田県仙北郡大地震調査報文」で発表している。⁽³⁾ 右の『秋田県震災の状況』と今村論文は、現在でも「秋田仙北地震」を研究する際の典拠になっている。⁽⁴⁾

これらの文献を用いて最も詳しく「秋田仙北地震」の様子を記しているのは『西仙北町郷土史 近代編』であり、被災時の状況が詳しく述べられている。⁽⁵⁾

本稿で紹介する「大地震の記」は、実はこれまでの「秋田仙北地震」研究で全く使われたことのない資料である。著者は佐々木金一郎という一九歳の秋田師範学校生徒で、秋田市の師範学校寄宿舎で地震に遭っている。この記録には地震発生時の寄宿舎内の様子が記されているばかりでなく、地震の調査に当たった今村明恒の講演内容、更には

*秋田県立博物館

震源地付近の様子が記されている。

そこで本稿では「大地震の記」を全文翻刻し、若き一学徒が「秋田仙北地震」をどのように体験し、記録に残したのかを考えていきたい。

1 全文翻刻

序

自然現象中恐ろしきものは、古より地震・雷・火事・親父と曰へり。其中にて地震は第一位にてある故、古人も第一に恐ろしきものなりしならん。

余、幸か不幸か其地震に遭遇したれば、其見聞を集め、以て後來に於て思ひ出の種となさん。

雲山人

大地震 大正三年三月十五日

夢を破る地震の一刹那

三学期の試験も三日過ぎ、十四には例によりて室会ありて話をして九時半眠りに就きぬ。朝方なりけん、面白き夢を破る物音に、例の如く誰か寝台より飛び落ちたると一に思ひしに、たちまち強く寝台に横になりし俣にほん／＼とほかされ、窓のがた／＼と鳴る、柱の動く音千万言を費すも凡筆の尽すあたわず。唯當時を想起して、身の毛を立たすのみ。其寝台上にありてふられたる時の感は実に云ひ難く、鳴音眠より覚めたる耳に聞ゆるをは、今正に校舎の倒れんとするなりと思へ共、すぐ起きんともせず、其まゝにありて今死ぬる時かと思ひ、又生ある如くも感ぜられ、又かく動かさるゝは何の為めなるやも思ひ浮ばず。又ゆらるゝは夢の如くにも思はれ、心よく動くと思ふ感も電光石火にて脳裏に大活動写真を映写したる感あり。其間約三分位なら

んか、それより床を出で、裸体のまゝ、すぐ寝台の下に入りて蛙臥しに臥し、床の響き甚だしく、寝台と共にほかされ、少しく弱くなりければ寝台を引きて台を出でんとする時、前に行李ありて其場に倒れしが、又起きて廊下に出でたるに四五名にて縄を下す時なり。其非常縄を伝はつて三人目に下りたり。先日までは雪も皆消え無かりしに、今日に限りて雪うすく降り居れり。それを裸足にて行きたる足冷たく、やうやくにして縄屑をつみたる所に行き寝衣を敷き居るに二三人の人々も来れり。其時火事だ火事だとけた、ましく叫ぶは、鉱山専門学校の方にあたつての声なり。鉱山学校の警鐘はたちまち乱打せられ、非常気笛は鳴り初め、人声雑然一大修羅の自然に見る如きなり。然かも微震尚やまず。東の空未だ明けず。人影「」なり。洗面場より入り、家に帰る廊下硝子破壊して甚だ危険なり。服を着けて外に出でたり。東雲立離れて西に帰るや雲足早く、十九日の残月尚西天に有り。時々来る微震に学校を逃げ出でたりしが、事無きになりしかば室に入れり。戸の開閉も人の足音も皆地震かと驚きて窓側に寄れる。あゝ、神経も又過敏なる事甚だし。二三名柱を動かす時は、隣室に居りし人の一驚せるを聞けり。再震又有るやも知れずとて、火を焚くを禁ぜり。試みに本校を見に行くに、物理化学教室の薬品入は大部分落ちて、白煙を上げて化合し初め居れり。硝子物も多くは破壊せられ、壁は横に割れ、或は落ち、校長室の本棚・鏡等すべて散在して居りき。南北に並べたる机は倒れ、東西に向きたる机は倒れず。白坂舎監長来りて「君、ひどかったねー。君、どうも」と云はれた。余程驚ける模様なり。後は神経過敏となり、微震にても逃げ、人の足音にも驚きぬ。

奇談も地震の種

かゝる地震なれば、一方ならず驚嘆し、命有つては話の種となれる事も又多し。其一々を書さんに、某室員は試験の時なれば、盛に勉強せる真中かの地震来りければ、すはと机の下にもぐり込みしに、其尻

〔郵便はかき 秋田市旭秋絵葉書倶楽部発行〕



一ノ 状惨村首強郡北仙縣田秋 震地大日五十月三年三正大



二ノ 状惨ノ村首強郡北仙縣田秋 震地大日五十月三年三正大

に筆立転び落ちたり。是はまだ尻の出で居る事なりと、頭陰して尻かくさずを知り、外に逃げ出でたりと。又某室員は、ストーブの上に蠟燭を灯し居れる時に地震の震動の為め消え、ばけつに入れある水のまかりたるありと。又某は小便に起きて廊下に行きたるに地震来りて廊下の左右にぶつけられ、眠り眼にてやうやくにして四つ這になりて出でたりと。又逃げて様子に行きたるに、震動して降るあたはず。腰ぬけて念仏申しきとの話もありて、過ぎし日に於ては笑ひの種も、時には命の縄引なり。或秋田市の婦人の如きは、すは地震と云ふより早く、丸々裸体にて衣服一枚腰巻もせで出でたりと。かゝる笑草は挙げきれずあらん。

県内の被害を報ずる号外

四月十五日の朝、南の方にあたりて赤く火事のありし時の如くなり。後より聞けば火事にあらざりきと。

昼頃に至り号外数回来る。日

く刈和野潰屋多、北の目全潰、飯詰停車場潰る。角館方面に大火ある模様なりと。尚電報不通、鉄道不通、二三日の後は全通の見込なり。或は新聞社にて自転車にて行けるのと大に人心を騒がしむ。多方には大約仙北刈和野方面多き事知られたるも、神宮寺より南のたより未不明。県南の人士心飛んで郷にありしならん。

悪魔に首をつかまれたる如き一夜

十五日は微震時々来り。夕方より又空もいと悪しく風だに無く、雪さへ少し降りぬ。人々の言を聞けば、皆晩に死ぬるやも知れず、寝室には行くもおそろしく、悪魔の瞰にあへる如く、暗き寝室の扉を開きて、此室にて死すべきか、又生くべきか、諸子生前の御厚意を謝す。今晚死せざれば、且神の助けかと何とはなしに信神の心を起さしめ、明日生き居る如き、又死するが如き感容に、頭内を右顧して死刑の宣告を受ける断頭台にあるかの如き感をひき起しぬ。戸は開けて万一に備へよとて聞きぬ。常には着ざるシヤケを着て就眠しぬ。然れ共眠る事あたわず。眠れりと思へば、寝台のぎいゝとなるに驚かされて眼を覚まし、便所に行く足音に驚き、前後目を覚ます事数回、眠るにもあらず、覚むるにもあらずして夜は明け、起床し、今生あるを喜び、こゝに友人と共に神明の加護を謝しき。

地震を調査せる今村博士の話 三月二十二日

本日十七日に大曲に着き、それより引続き調査をした其結果につき大要を述べん。

二十九年六郷大地震は昨年迄調べ、和文調査会七七号に論文を提出した。今回の死亡者は九四名にて、潰屋六百にて六戸に一人死す。普通は十戸に一人死すは通例なり。六郷地震の時は三十戸に一人の死人ありて、最近にて此程死人少きはなし。

二十七年酒田の地震は三戸に一人死んだ割合であった。今回の死亡人多くは睡眠時間なりければなるべし。

地震を計るには微動計あり。是は十里も震源地を離る、所にて身に感ぜざるをよく計るを得、而して今回のものは携帯用のものにて価三百円なり。

原動力の方向と強さ

激震区にては東西の方向、秋田市は北三十度東の方向なり。強さは激震地強首・刈和野等にては毎秒加速度四千ミリ米で、自分の重力の半分の力で横に震られた事になる。水平動は四千ミリは最大限なり。上下動は家屋に対しては害少し。大曲より雄物川沿岸地方は自分の重さの三分の一位で（強震地）ありしならん。

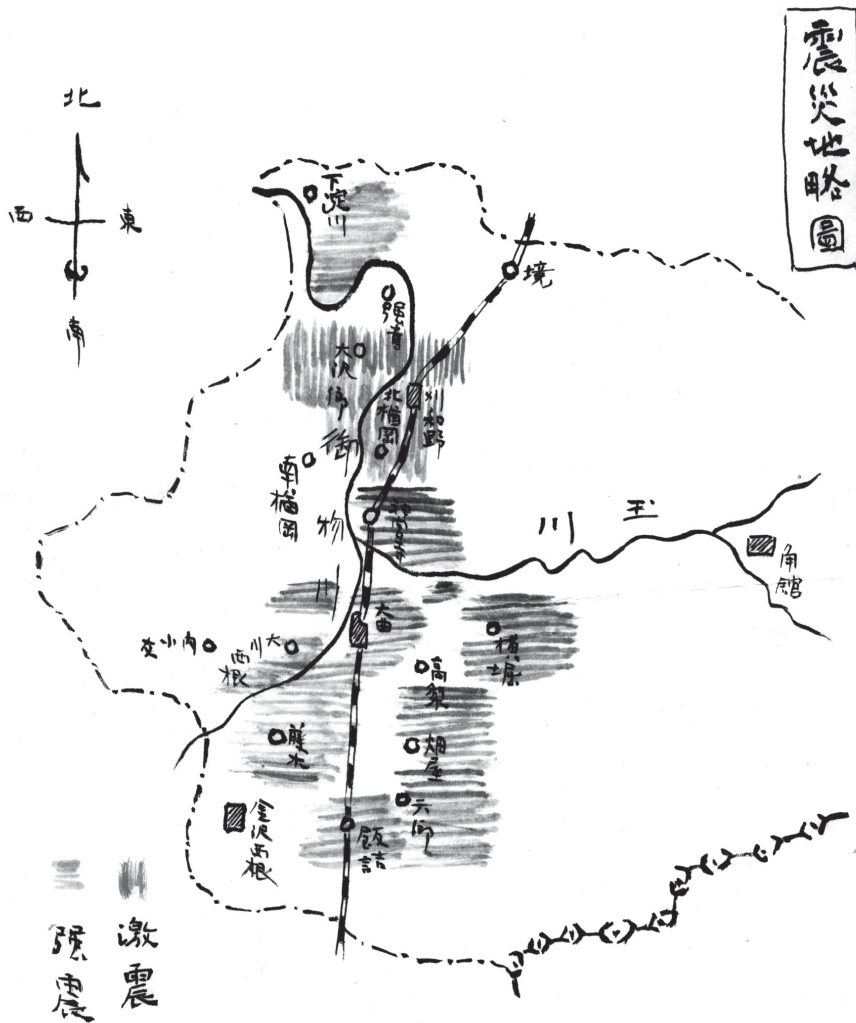
地震の大きさ・エネルギー

其全体のエネルギーは六郷大地震に比し、十分の一程度のものならん。

震源の位置

其源は震源地と同一の場所にはあらず。地盤の弱き所は激震地なり。激震地は御物川地方の沿岸にて埋りたる所なり。所々に沼あるを見ても、明に知られる事なり。源を探るには其方向（震動の）と強さの外に、余震の源の位置を知りて定むるなり。それには微動計を用ひ、大曲郡役所に備へつけ、十七日の午後六時より昼夜の間に百六回の地震を感じたり。

元来波には縦波と横波とあり。初の波動は疎密波にして、一秒に一里半の速度を有し、起る高低波（横波）は一秒間に三十町の速度を有



大正三年三月十一日
秋田新報所載

に走る線に添ひて働きたり。其断層線延長せば今回の断層と重なる程になるなり。
 家屋は杉材の如き裂け易きものは悪く、頭重くなり、しだいに強し。
 其他地震帯の上に於て位置は移るものなり（大森博士の談なり）。
 数百年間同一地に発生する事なし。但し他の地震の害を受くるは別問題なり。
 余震は初のものより二十分の一より強きものなし。

余震全体のエネルギーは大震のエネルギーの八十分の一に過ぎず。而して其余震は数ヶ月の後に発生する事あり。濃尾地震の如きは、二三月の後に発生せり。
 地盤の堅き天然地は弱く、人工にて埋めたる所は強し。約三倍位も強し。天然の堅き地盤より建築すれば、其地盤の振数より振動せざれば弱し。尚秋田市地方は二寸五分位動き、強首地方は七八寸動きしならん。以上

激震地の視察

三月二十三日、鈴木由利と共に帰郷の途中刈和野に下車す。車中汽車はしばし徐行す。
 刈和野駅待合に至れば、今や最中に修繕しつつあり。刈和野より西北に進む道を進み行けば、御物川右岸に出づ。刈和野にて全潰家屋四十戸もありしと云へ共、皆此川の沿岸の地のみ多きなり。全潰のものは屋根のみ全くして柱裂折レ、其中に藁敷きて夢を結べるものあり。半壊なるものは隣家によりかゝりて在るもの、壁の落ちて傾ける庫等、其惨たる有様筆墨の万分の一も及ばざるをうらむ。
 渡場より舟に乗りて西岸に達す。其河原に亀裂を生じ、それより青砂を噴き出せり。此地に架したる橋は未だ落成せざるに、波状をなし、所々に食ひ異ひを生ぜり。北の目に入れば、其家屋ごとく潰れ、側に仮小屋を作り、多くは其家を解し居たり。其家多くは茅葺にして、潰屋の屋根に穴を開きて出入するあり。而して忌中・負傷者何名と書きたる

小紙を貼りあり。赤十字社にては数名の医師・看護婦を派遣して、傷者の救助につとめてありとて、北の目にては潰れざる家に赤十字旗を翻へして、其活動せる様明に知られたり。

北の目より進めば小さき分教室あり。先生を訪へば、今日より授業せんかと思へりとて、児童等と共に板戸等を作り居れり。寺館辺は案外潰家無し。御物川沿岸は強かりしは事実なり。寺館小学校前に至れば、いづれより持ち来れるものなるや救助米分配所てふ板を立て、外に米置きて盛に米を分配せるを見たり。「憐れなや。一升の米にて十人一日を過さんとすれば一日僅に一合なるを、其米も十分ならず」は、多くの人の言なるべし。

此辺の田にて亀裂を生じ、それより青砂を水と共に噴き出し、砂五六寸の高さに堆積せしめたる所、処々にあり。或は一枚の田全く砂の積る所となりて、畦も見えざる程に至りたる所あり。聞くに水は三四尺の高きに噴出せる所ありと、と北の目辺の人語る。それによりても如何に甚だしきかの万分の一は想ひ浮ばる、事ならん。

師範生の応援

知事、師範生震害地に応援に行かざると云ひしに對し、生徒ことに時の三年生（自分等）は三年のみにも必ず応援に行きたしと赤誠燃ゆるの士は立ちたりしが、都合によりて、まづ拾五名を二十二日早朝白坂教諭引率の下に強首方面に出発したり。聞く所によれば、二十三日午後より天幕小屋を二戸を二十三日朝までに造り、二十三日震源地を視察して九升田の天幕に帰り、二十四日に開散せるなりと。

悲劇の種

仙北郡大沢郷北の目佐々木甚工門方にては、其息子と其妻共に二十有余の壮々たる人物にて、其事も共に若き時より同家にて養はれたる

なるが、このの外海老の契深かりしが、十五日の大震にて無「」にも若夫婦就眠の俣にて梁に潰されて死をとげたりと、二世の契とはしかあるものを云ふか。某其家を訪へるに老母出で来り「困たてばよ。若者だに死なれて、おれ生ても何楽あるだ」老眼に涙を浮べて語られて、某も無言にて退きたりきと余に語りき。

又仙北郡淀川村小種新田佐々木清治は過般参宮団体に入りて東海道旅行中の折から、仙北辺激震なりとの電報に接し、たゞちに帰り、車窓より眺むる所容易ならざるより、我家に行くば、こは如何に行くまでは一家団欒妻子相語りしに、今は早家と共に一家八人灰燼となれるを如何せん。唯生あるは二匹の鶏のみ。余りの事に涙も出でずと云ひきとなん。

其模様を聞くに、地震にて家は潰れ、其家の主婦は身半身を出して、助けてくれ、助けてくれと叫ぶより、人々行きて手をにぎり引きたるに、腰以下動かさず、其中火焰焰と燃え上りて焼け来る。止むなく其手をはなさんとすれば、堅く握りてはなさず、やうやくにして手をはなしたるに、ついに焼け死したりと。某女は産婦にて、他人同所に居りしが、潰る、や水屋の窓より出で、助かりたりと。さても不思議の事なりと云ふべし。

其他子を思ふ親心、子を抱きて自分は潰されて死し、子は其体腹にありて助かりし等聞くも、哀のこと多かりけり。

仮小屋生活

二十三日故郷に帰れば鈴木熊吉・佐々木駒治・佐藤為蔵の家は半潰にて柱折れたり。是を帰納すれば角間川堰の岸にありとなるなり。是により見れば、当地も強かりし事想像し得らる、なり。

三月二十八日午前三時半、強震来る。すはと立ちて障子を開かんとすれば出来ず。其中にやみぬ。雨戸を開けば雪寸余も積りて白し。家の外をめぐりて仮小屋に至る。一家の人皆、方二間の中につまりて居

〈郵便はかき 秋田市旭秋絵葉書倶楽部発行〉



秋田縣北郡利和町の惨状 大正三年三月十五日大地震



秋田縣北郡野目村の惨状 大正三年三月十五日大地震

りぬ。一番鳥は鳴きぬ。づい
て隣の鶏又鳴きぬ。二番鳥鳴き、
東天やうやくにして白み、悪魔
の黒雲手を「」へて西方に逃
げぬ。二十八日は微震・弱震相
次いで来り。不安の念禁するあ
たはず。こゝに於て兼て設けた
る仮小屋に一睡の夢を借らんと
祖母と弟と行きぬ。下に藁を敷
き、其上に枚を敷き、藁の上に
布団を敷きてふす。

午後七時頃なりけん。西方に
あたりごうくと鳴ると思ふ間
も無く、土はゆられて心地悪し。
家に居りし人々は、あはて、外
に出でぬ。ついで四五回鳴動
して震動せり。されど仮小屋の
事なれば生命をうばはる、恐れ
なく眠りぬ。つりランプは薄黒
く照らして気味悪きも、しかし
安らかなり。祖母は大なる家に
居るは心くるしく、仮小屋に居
るは誠に安樂なり。実におかし
き事であると云はれたが、余の
心中も又かくの如し。夜もふけ
ぬ。早春の事なれば未だ寒し。
雪は降り来りて板の間より入り
て我寝顔に散りて、目をさまさ
しむ。

地層の変動か井戸水の枯渇

我家の井戸水は常と変り無く清らかなるも、所々より其水の枯渇して甚だ困苦を生ぜりとの報あり。狐塚の内にも、井戸水の変化無きは「（マ）」にて、他「（マ）」は混濁したると小学校にても濁りて用ふるを得ずとて困り居りき。

即ち薄赤く濁り居りしなり。精兵（マ）にてはたいてい濁りて用ふるあはず。上田村四津屋にても、かゝる現象ありとの話を聞きぬ。

余一日四ツ屋の某人と会ひしに、地震の話ありし後、私方の井戸は地震で濁らずして心うれしく思ひ居りしに、一日は日一日と水濁し、今（二十八日）は手桶にて汲むあたはずと。水層にも変動のありしものならんとは想像するを得るなり。

田に青砂の噴出

震源地近くにては、ま、青砂の噴出ありて、五六寸のものありたる事は先にも書きたり。我村にても一二寸出でたる所ま、あり。昔の大地震に某氏の庭より泉出で川になりしてふ事聞きしが、それ等も眼前に見らるゝにて、支那的形容詞を用ひなば云ひ得べし。とかく青砂は水と共に噴出でなるなれば、其出づる時は勢又強かりしならん。強首村の某氏に聞くに、激震のある時は砂水二三尺の高きに噴出せるを見たりと云ふ人ありしと云へり。実にかくもあらんか。我家の家舎の田に一寸位出でたるを見たり。其他数ヶ所にありき。

震源地視察

三月郷里に帰る途中一寸刈和野に下車し、北の目・寺館などの家の潰れた惨状を見てあつたが、震源地見ないでは御話にならないと云ふ

ので出かける事になった。丁度よく田口慶之助君は寺館で一学期中同室で、ぜひ御出と云ふから、例の学生の無遠慮なしかたを取って、七月二十日秋田市を出て刈和野に下りた。其晩は寺館の田口慶之助君の家の人となった。二十一日六時頃出て、途中寺館小学校、九升田の石川翁事務所を訪ひ、親しく聞いて出たのは九時頃過ぎであつたでせう。それから田口君と語りつ笑ひつ行つた。少し坂を上ると、此は大きい台地になつて居つて、其上がなかく広い。そこを横断して行つた。十七聯隊の宿舎も其野の西側に立てられてある。毎年此辺の野に陸軍の演習をやるに來ると田口君が此れが立たない時は、ずい分私等方の村は迷惑したもんだよ。其野を過ぎ、大沢郷小学校のかたはらを通つて、謂る大沢郷を通りぬけて、谷になつて居る細い田を通つて行くのである。此細い谷は所々地震の爲めに出來た山崩れが出來て、道などは大分埋つて居る。二人共制服で靴を穿いて居るので、なかく歩き方も楽ではない。八木山だかと云ふ小部落からは、もう上り道だので大困難。山の七八間の所、三四丈位ひくくなつて崩れた所などもある。今は人夫がたくさん居つて、盛に道をこしらへて居る。四尺幅位の小さいな道である。汗はもう出る滝の如しと云ふが、滝所では無い。上衣はもうとうに脱いで肩にかけた。ことに天氣が一昨日まで雨が降つたのがやめたので、急に暑く全く無風の姿であるから、大に扇を動したがまに合はない。それに渴して來た。お腹がすいて來たので、少し前まで大元気で吟詩や唱歌をやつたが、今は声一言も出ないで、ぐんぐんと下りて行つたり、上つて行つたり、休まうか、行かうな、もう少しだらうと農夫に道聞き聞き行つたが、こんどは半里ばかりで布又たで（マ）細い二十間位の細田有る所を一問ばかりの細流が有る。それを逆つて行くと即ち布又たさうで、此辺ではこんなちっぽけな田の有る所を此田圃（タンボ）を通つてなど道を教へて下さるのから見ると、我々から考へると、猫の額見た様（マ）な所を田圃など云ふてとの感が起るが、此地はこんな所は是を以て大平原と思ふて居るに異がない。勿論田としてのである。其行く左側の山は第二期層のあま岩（頁

岩)で、たいへんにはげが多い。赤いはげがもう峯つゞきになつて居る。そこを行くと布又が現れた。まづ驚いたのは、あの山崩れと思ひながら道こしらへの人夫たくさん居る所を行つて、或一名屋に腰を下した。こゝの家では、なんだか馴れて居る様に花莖を敷き、こんな所でお茶を出したり、なんだかせんべいを出したりする。まづ僕は水を七八杯傾けさ…と云ふので。おむすびにかずりついた。

此家では檜のまげ腰に梅漬・きうり漬、水に入れたものなどを出した。まづ平げて小憩した。其家の女、化石を出して来て、土からこんなもの出るなんて不思議だもんだなど云ふて、巻貝・うに・二枚貝など五つばかり出して来て、見に来た人達だの、これ一つ二十幾だの三十幾だの、ほんぎあ(当方も)でも無い価値出して買ふもんだ。はあはあ…と聞いて居つたよ。あの地震あつた日はどんなものであつたかと聞くと、なんとをらあ、何もかも夢の様で、みりく／＼だんだか、ぐわりく／＼だんだか、地響だだか、さつぱりまるで夢中だんだ。逃げろと思つても出られない。やつとやめてから出て見ると、此通りおにや(お庭)さ、こただ大ヶ岩崩れて来た居たたんし、は、水はあの向の家の軒までついてあつた。それを此通り洞門(トンネル)をこしらへて水をひかし、五月の末だか六月の初めだかにさいきしたのもの。なんとをらあ、あの時などよく助かつたものだと思つて居る、など語るのを聞き、ありがたうと十幾を置き出て来る時、よだばもつて行つてもえ、など云ふので、そうかそれじゃもらはうと紙に包んで山に出てきた。此人、一つ二十幾にも買ふなど云ふてあつたが、出て来る時顔を見ると不本意だ様だ風をして居つた。余り地震を利用して銭取る工夫などすると僕の様や者が居る。さうすると悪さかしくなると云ふので、やつぱり人が多く入る所の人気の油断にならない第一歩は、まづこんなものじゃらう。布又と云ふ所は、家は五六軒しかない。そして潰れ家屋は一軒より見あたらない。水が引いてから二軒ばかりつぶれたと云ふたが、やはり上下動は人家には害少いと云ふたが、明に否定しべからざる事が明になる。田口君と小いのは礫から二三間の大き

いものまでやはりピラミッドを一時に数十も崩した様な感があるの
で、此れだけは書くことは無益だから、至つて大切であるが不及ざる
筆をなぐるのみである。岩は例のスエールで柔かい。所々に貝の化石
がある。僕も二つばかり取つた。其間を二人或は下り、或は上りし
て、丁度猿の様にして渡つて行つた。ずい分こはいのもあつた。動く
様な割れて居る中を歩む時は、やはり恐ろしい様な感がしてあつた。
そして所々非常な硫黄臭い所などもあつて、むせる様であつた。余程
奥に行くと、そこに七八間の中さで十二三間も有りさうな平な所があ
る。これは岩がすべつたので、こんな大きい平な所が出来たのでたら
う。此辺の岩に種々東京府下何某とか青森何某、何々組合とか、ずい
分遠方から来た人も書いてあつた。此れ等を見て其人の心理状態を考
へるも面白い。華嚴の滝の下の所にも名刺などを置いて行くものが多
くあつたが、此等を見ると小生は、此等の冒険を侵して此地まで来た
ぞてふ名譽は冒険艱難によつて得たのをほこるのではないだらうか。
それからまた岩を飛び越えて湯をたてたと云ふ所に行つた。丸い湯槽
一つ置、其側に非常に硫黄臭い水がどう／＼と流れ落ちて居る。口に
入れると、何だかしぶい様な塩気の有る水であつた。そこから三町ば
かりで前の家の所に出た。それから帰つたが、風が無いので困つたが、
香のよい白百合の花を幾本手をり、是の力によつてなぐさめられて、
前の如く口吟談笑して二人で帰つた。あ、面白かつた。何でも戦に出
て凱旋する様な気がする。帰り途は近い所を来たので、二時間半許で
田口君の家についたのは丁度六時であつた。晩には種々の話し、翌廿
二日田口君に送られ刈和野駅発十時頃の汽車で帰郷した。想へば記念
の見学であつた。それも大部分田口君の御陰によつて、うまく行つた。
長く合せて同君に大に謝する次第である。

(大正三年八月九日想出して筆をはしらす、唯後來の想出の種と

志ませう。

雲 山生)

2 展示品『想出』と佐々木金一郎について

右に翻刻した「大地震の記」は、本館人文展示室の展示品である『想出』の一部分である。著者は佐々木金一郎（一八九五～一九五八）で、秋田県平鹿郡や雄勝郡の小学校（国民学校）校長や田根森村長を勤めた人物である。また郷土史にも造詣が深く、昭和二十八年（一九五三）には秋田県史編纂の参与に就き、同二十九年から三十一年にかけて『羽後新報』に「秋田立志会暴動記」を九十六回寄稿している。⁶⁾佐々木が郷土史研究を進める過程で収集した資料は、現在、本館と秋田県公文書館に収蔵されている。

『想出』は佐々木が秋田師範学校在学中に記述した記録である。五十八丁から成る『想出』の構成は次の通りである。

- ・ 目次
- ・ 台風の跡に 二～四丁
- ・ 黒川噴油見学 五～八丁
- ・ 欧州戦乱（山本校長講演） 九～二十八丁
- ・ 皇太后陛下御不例 二十九～三十五丁
- ・ 大地震の記 三十六～五十八丁

佐々木金一郎が『想出』を書いたのは大正三年（一九一四）である。その内容は、秋田師範学校生である佐々木が、特筆に値すると判断した出来事を書き留めたものである。ここから『想出』は、後年郷土史家として大成する佐々木が十九歳の時点において、何に興味を抱き、どのようなことを考えたのかを読み取ることができる格好の資料であると言える。

3 「大地震の記」の構成

「大地震の記」の内容は、発生時の体験、三月二十二日に行われた

今村明恒の講演内容、そして震源地探訪の三つに区分することができる。

「大地震の記」の執筆時期は地震発生から約五ヶ月後の八月九日であり、地震発生直後に書かれたものではない。そこから描写の正確さは欠けると言わざるを得ないが、それでもなお読み手には地震発生時の恐怖感が伝わってくる。またそれに加えて、恐怖感や死生観が時間の経過によりどのように変容していったのかについて、極めて有力な手がかりを与えてくれる。

地震発生時佐々木は秋田師範学校三年生で、秋田市内の寄宿舎で生活していた。大正三年（一九一四）三月十五日の地震発生時、佐々木は「面白き夢を破る物音に、また誰か寝台から落ちた」と思ったが、たちまち「ほんぼんとほかされ」（方言…突き上げられる）「柱の動く音千万言を費やすも凡筆の筆にあたわず」と記すほどの振動に見舞われた。

唯當時を想起して、身の毛を立たすのみ。其寝台上にありてふられたる時の感は実に云ひ難く、鳴音眠より覚めたる耳に聞ゆるを、今正に校舎の倒れんとするなりと思へ共、すぐ起きんともせず、其まゝにありて、今死ぬる時かと思ひ、又生ある如くも感ぜられ、又かく動かさるゝは何の為めなるやと思ひ浮ばず。又ゆるるゝは夢の如くにも思はれ、心よく動く云ふ感も電光石火にて脳裏に大活動写真を映写したる感あり。其間約三分位ならんか（後略）

秋田市の震度は五であるが、校舎が倒壊するかもしれないと思えるほどの揺れであり、その恐怖感は筆舌に尽くせぬものがあっただろう。ところが地震発生から時間が経過してくると、恐怖体験を笑う心の余裕ができてきたことが窺える。「奇談も地震の種」を見ると、ある寄宿舎の室員は、試験勉強中に地震に遭遇し、急いで机にもぐり込むも、机上の筆立てが尻に落ち「頭隠して尻隠さずとはこのこと」と外

に逃げたとある。加えて、脱出の際にバケツをひっくり返した室員や裸体で逃げた秋田の一人婦の話に「かゝる笑草は挙げきれずあらん」と感想を書いている。しかしまた「過ぎし日に於ては笑ひの種も、時には命の縄引なり」と記しており、これらの笑い話は恐怖体験を乗り越えた者のみが得られる安堵感であることが分かる。

筆致が変化するのは「地震を調査せる今村博士の話」以降の七節で、「原動力の方向と強さ」「地震の大きさ・エネルギー」「震源の位置」「余震の源」「原動力」「従来の地震との関係」まで地震のメカニズムについて書かれている。

今村博士とは、東京帝国大学理科大学で地震学の助教授を勤めていた今村明恒（一八七〇〜一九四八）で、当時の『新報』を見ると、地震発生の二日後の三月十七日から今村は震源地付近の調査を行い、同月二十二日午後一時に秋田市の県公会堂で講演を行っていることが分かった。

しかし「地震を調査せる今村博士の話」から「従来の地震との関係」に至る七節が、実際に講演を聞いて書いたものなのか、新聞紙上に掲載された講演内容を書いたものなのか「大地震の記」を読んだだけでは分からない。そこで講演後の『新報』から、今村明恒の言葉を拾ってみることにする。

大正三年三月二十三日『新報』二面

○今回の震災に就て（一）——理学博士今村明恒氏談——

予は震災予防調査会の命に依り当県下今回の震災を調査すべく、去る十七日震災激震区域に到着して直ちに調査に着手し、以て今二十二日に及べり。予は先きに明治二十九年の六郷大地震に就いて研究する所ありき。結果当該地震の原因其他に就き、震災予防調査会和文報告第七十七号（昨年夏季出版）に掲載せり。去れば今回の地震調査は予に取りて頗る趣味あるものなり。人命の損害は我邦の木造家屋十軒の潰倒に対して一人の死者を出すを通

常の場合とするものなるが、去る二十九年の場合は六千二十四棟の潰家に対して三百六人の死者を出し、凡そ三十軒に一人の割合となり、近時の地震中にて死人の割合に最少なるものなりき。是一週間前よりの徴候（前震）に依りて人々警戒を加へたるが上に発震の時刻午後五時にして、農家は大抵戸外にありし時なりしこと等に依る。然るに今回は凡そ六百軒の潰家に対して九十四名の死者を出し、其割合六軒に一人となりて通常の場合に比較し凡そ二倍の割合を示せり。是れ震災区域に対して何等の前徴を感知せざりしと、時刻が睡眠の時期なりしことによるべく、同地方の被害者に対しては誠に同情に堪えざるなり。今回は去る十二日前震らしきものを秋田測候所に於て記録せるが、此の前後と大震までとの間に感知せられざる程度の前震ありしや否やに就いては動計の備なかりし為めに論議すること能はず。

○同一地に地震再びなし

大震後に起るべき余震は、どんな強いものがあっても最初の地震の二十分の一位に過ぎぬものである。而してその余震の起るのは、十日後に起るものやら二十日後に起るものやら、それは解らぬ。美濃の大震の如きは二ヶ月後にこの余震は起つて居るのである。それから大震を起した場所はもう一回大震を起すことは、数百年と云ふ程度に於てはない。但し大震のあつた以外の地に起き、其の余波を蒙ることは格別である云々。

大正三年三月二十四日『新報』二面

○今回の震災に就て（二）——理学博士今村明恒氏談——

▲原動力と強さ

余は各種の材料によりて原動力の方向と強さを調査したりしが、激震区域に於ける方向は大抵東西にして、強さは強首、北の目、刈和野、宇留井谷地等に於て最強の地震力（水平動の加速度毎秒々々四千ミリメートルにして自己重量の二分の一位に当る）

に達したり。但し是等は震度最も強大なる区域にして、其次の烈震区域は尚ほ西方大正寺村に達し、東方は仙北、平鹿の一部分たる横堀、高梨、畑屋、大曲等の諸町村を含み、北部は僅に峰吉川村に達し、其の区域東西に頗る長く帯形をなせり。但し地震の^(ママ)大さは比較的マに小にして、廿九年の場合の十分の一の程度なりし様思はる。

▲原動力の位置

激震区域即ち是れ震原^(ママ)にあらず。多くは震原に遠くして地盤極めて羸弱なる地方より、即ち前記激震の町村部落は大抵雄物川に沿ひたる埋立地盤上によりて、刈和野、強首等が従来の河床上に立てるは、半月形を画ける沼地の存在によりて何人にも首肯せらるべし。余は原動力の位置を求めんが爲めに震動の方向と強さとを参考に採りしこと勿論であるが、特に余震の位置と地変の分數とによりしこと最も大なり。余震の位置を求めんが爲めに、余は大森式簡單微動計(倍数百倍)を携帯し、之を仙北郡役所内度量衡室内に据附けて加藤助手をして専ら観測の任に当らしめたり(郡役所よりは此点につきても特別なる補助を与へられたり)。之れによりて震原の方向と距離とを知るものなるが、観測は十七日午後六時より二十一日午後一時半まで継続して百十回位の強、弱、微、極微震を記録したるが、其の結果、余震の震原が東は北檜岡附近より西は大正寺村萱ヶ沢附近を貫きて、ほぼ東西に走れる一線上に並立することを発見したり(震原調査に携帯微動計を応用したるは今回を以て嚆矢とす)。余は其の外刈和野、南檜岡に於ても余震の震原の方向と距離とを目測したるが、其結果前記の線を余り遠さからさることを発見したり。余震の位置は即ち最初の大震に一致すとは言へざるも、大震の震原を推測するには最も有力なり。

次に地変を最も多く起せる区域は、南檜岡村の春木沢より西方に進みて、道川、大沢郷村の円行寺、大正寺村の萱ヶ沢に至れる

山崩れにして、余震の震原多くは此上にあり。但し積雪尚ほ山上を被へるを以て、此際容易に踏査し得へからず。故に余は此東西に走れる線が、更に西方の何れに達せるやを講究すること能はざりき。但し其東方に於ては、春木沢より雄物川を越えて其右岸に余り著しからざる一の断層線を発見したり。其段違は最高四寸位にして北方下かり、且つ西に四寸位ずれたる所あり。而して此線を追跡するときは雄物川右岸より出発して北檜岡の本村南方の田畑を過ぎ、神宮寺の本村に至りて其痕跡を失へり。其方向南八百度東位にして、此間の延長は約一里十町に達す(余は便宜の爲め、仮りに之を檜岡断層と呼ばん)。

檜岡断層は更に西方に進みて第三紀層を貫くものなるべきも、此後の調査に譲ること、したり。然り而して今回の地震の原動力は、ほぼ此線を包含して其中心は、大沢郷・大正寺附近にあるべし。即ち此線に沿ひて原動力は東西の方向に働き、以て今回の震災を起し、又た断層線を生じたるものと推測す。

大正三年三月二十五日『新報』二面

○今回の震災に就て(三) — 理学博士今村明恒氏談 —

▲従来の地震との関係

本地震と最も親密なる関係あるは、去る二十九年の六郷大地震なりとす。前回の震源に就いて余の所見は、原動力の働ける区域、和賀谷の川舟部落より真昼山を貫きて(或は高梨に至る)東西に走れる地帯なることを前記震災報告第七十七号に述べ置きたるが、今回の震央帯とはほぼ東西に走れる一直線上にあり。即ち今回の場合は、前回のもの、如きも西方は不明にして、道川村の西海岸にまで達せるものなるか否か断言し難し。而して今回の場合は、前回の場合よりも其程度小となりたれば、更に仮りに此線が今後数百年の後、西方に延長することありても其勢力更に一層微弱なるものとなるへしと余は憶測するものなり(当地の某新

間に余の説として、此次の地震地は秋田地方ならんかとのことを掲げたものありとのことなるが、余は嘗て然か考へたることもなく、又言外したることもなく何かの誤りなるべし。

▲建築物の被害

用材は上部小屋組に過大なるものを用ひたる割合に、軸部との接続極めて薄弱にして潰倒の方法、殆んど柱の上下柄を挫折したること、去る二十九年の場合に中村、曾根二博士の観察したる所と全く同様なり。されば今後修繕をなすには、当時震災予防調査会に於て本県のために討議決定して廻附したる注意による法最も機宜に適したるものなるべし。注意書左の如し。

一 傾斜したる家屋は之を垂直に起し、尚ほ傾斜の虞あるものは、支柱を添ふること。

一 屋根はなるべく軽量にすること。

一 柱梁の挫折したるものは勿論、継手、仕口の毀損せるものも必ず添木若くは添鉄を附し「ボルト」を以て之を締結すること。但し「ボルト」を得難き場合には鋸又は木螺旋を以て適宜に之に代ふることを得。

一 建物の何たるを問はず、成るべく筋違木を附して骨組を固むること。

一 煉瓦造の煙突傾斜し、若くは罅裂を生じたるものは、堅固に積み直すこと。

一 筋違木の添方「ボルト」の入れ方等其他詳細は、総て要領書（本会報告第六号）参看のこと。

前記要領書中、特に参考となるべきものは、桁と柱との接合に、両面より短冊形の平鉄を当て「ボルト」を以て締附けること、及び筋違木を桁と柱との間に斜に当て、其接合には桁及び柱を多く毀損せざる様「ボルト」を以て締附けることなるべし。

▲雑件

一度今回の如き大震を発生したる地方は、今後長く静謐の状態

にあるべきことは歴史上顕著なる事実なり。故に二十九年及び今回の震源地方は他地方に発生したる大震の余波を蒙むることは格別として、今後数百年間は当該地方より大震を発生することなかるべし。又余震に就ても前数日警告したる通りのことなれば、現在危険状態にある半倒家屋を除くの外、他に損害を来たすべき余震の襲来なかるべし。

市街地に於ては震度甚しき差違あり。岩石上の天然地盤は震度最も軽きも、第四紀層の天然地盤は之に次ぎ人工を以て埋立てたる所、特に塵芥類を用ひたる所は震度最も強くして、天然地盤の三倍位に達するを通常とす。されど此埋立を除きて下部の天然地盤より工事を施さば全く安全なるべし。市街地に於て震度分布図を作るとは必要のことなるも、今後の講究問題とすべし（をばり）。

右のように、三月二十二日に行われた今村明恒の講演の内容は、同月二十三日から三日間に渡り『新報』に掲載されている。この内容と「大地震の記」の記述は、次の三点が異なる。

第一は書き出しの違いである。「大地震の記」の「地震を調査せる今村博士の話」は「本日十七日に大曲に着き、それより引続き調査をした其結果につき大要を述べん」で始まっているが、新聞報道は「予は震災予防調査会の命に依り当県下今回の震災を調査すべく、去る十七日震災激震区域に到着して直ちに調査に着手し、以て今二十二日に及べり」で始まっている。もし佐々木が新聞記事を「大地震の記」に写したとすると、書き出しは『新報』のようになるに違いない。それ故「地震を調査せる今村博士の話」は、講演冒頭の今村の言葉を書いたものだと考えることができる。

両者の相違の第二は、節の立て方である。「大地震の記」と新聞記事の内容を比較すると、内容が同じ箇所が多いことに気づく。新聞記事をまとめると「大地震の記」のような記述になると言っても過言ではない。しかし節の立て方が異なっている。前者は「原動力の方向と

強さ」「地震の大きさ・エネルギー」「震源の位置」「余震の源」「原動力」「従来の地震との関係」という節がある一方で、後者は「同一地に地震再びなし」「原動力の強さ」「原動力の位置」「従来の地震との関係」「建築物の被害」「雑件」となっている。新聞記事を読んだだけであれば、節の立て方は後者に近くなるが、そうやってはいない。それ故「大地震の記」の節の立て方は、三月二十二日の今村講演の節と考えることができる。

第三は「大地震の記」の記述に、新聞には書かれていない内容が書かれていることである。例えば「地震を調査せる今村博士の話」の節に地震を調査した微動計は価格三百円とあるが、新聞には「大森式簡単微動計（倍数百倍）」とあるのみで価格は書かれていない。また「大地震の記」の「従来の地震との関係」の節には、大森博士という人物名が登場する。これは今村の上司である大森房吉（一八六八～一九二三）であるが、新聞では大森房吉は登場せず、先にあげた「大森式簡単微動計」に大森の名前が出るのみである。

この三つの相違点から筆者は、佐々木金一郎は今村明恒の講演に参加し、講演内容を「大地震の記」に記したと考える。三月二十三日『新報』を見ると、この講演について「聴者堂内に溢れたり」と記されている。この聴衆の一人が佐々木金一郎であることを考えると、満座の会場で今村明恒の話に食い入るように聞く彼の姿が想像できる。

しかしここで考えなくてはならないのは、佐々木金一郎が「大地震の記」に三月十九日『新報』三面の「○震災被害状況調（三月十七日午後四時調）警察部」の記事を貼り付けたり、同月二十一日付け同紙二面の「震災地略図」をトレースしていることである。これまで見てきたように、地震の専門家ではない佐々木が詳細に講演内容を記載していることを考えると、彼は地震発生直後から新聞を熟読し、知識を得た上で講演に臨んでいると考えた方が妥当である。「県内の被害を報ずる号外」の節を見ると、佐々木は号外を見て震災の情報を入手したとある。ここから当時の秋田市内の人々、少なくとも秋田師範学校

寄宿舎の生徒は、地震の正確な情報を新聞から得ていたことが分かる。そこで地震発生後から講演当日に至る『新報』で掲載された今村明恒関連の記事を参考までにあげることにする。

大正三年三月十八日『新報』二面

○今村博士の観測―船山測候所長の第一回報告―

今村博士は加藤助手を従へ昨日午後一時四十分仙北郡大曲町に着す。博士は震動計を携帯し来り。郡役所の度量衡検査室の最も安全且つ地震の堅固なる個所に該器を据附け地震動を計る積りにて据附中なり。尚ほ博士は第一着手として震源地を探検する筈にて器械の据附時間に余裕のある際は、直ちに強首方面に出張の筈なり。博士は目下の尨未た意見を發表せざるも、只今後は大なる震動なきを明言せり。

○今村博士の報告―第二回の観測―

今村博士の報告に依れば、今回の地震は明治二十九年に於ける大震と同性質のものにて、震源地は強首刈和野附近にありて、二十九年のものに更に震央線の延長したる場所なるもの、如し。其の区域は二十九年に比すれば四分の一以下ならんも、割合に死者の少なからざるは発震時は丁度就寝の時期なりし為めならん。猶ほ今回の地震は十五日朝の分にて終結したるものにて、最早や強震はなしと云へども、微震は尚ほ続くべく余震中に強震も時々あるべけれども、最初の強震に比すれば、其強さ数十分の一に過ぎざるべく、但し此の際罹災者は沈着にし、地震に合ふも急がざる様注意せざれば、自から其の災を招く事あるべしと県庁へ仙北郡長より第二回報告あり。猶ほ今村博士は昨日午後三時頃刈和野方面に向け調査すべく出発せり。

大正三年三月二十日『新報』二面

○震源は地滑り―今村博士の調査報告（二）―

十八日は仙北郡大沢郷円行寺、布又を視察す。今回の地震は或は断層に起因するものなるやを検せしも、単純なる地滑なることを確めたり。同所に於いては「スリップ」に閉塞せられて長形約二丁位筒形をなせる沼を為し、同地の住民四戸は立退の準備中なり。是は成るべく速に切開かされは自然に決潰して耕地を荒廢せしむるの虞れあり。此地の地盤は長野地方に酷似し、所謂第三期層にして同地に於ては、此の如き原因に由る湖沼の決潰少からず。今回の地震は刈和野も大なる上下動を為したるか、余の視察したる中には北ノ目は最も烈しき上下動を被りたり。此等の地に於ける大なる被害は、家屋の建築に於て頭部の重きと、又材木の杉材を用ゐたる為め切断多く、軸部小屋組の内挫折し倒潰せられたるものあり。此の点に付ては明治二十九年の震災に於て曾根・中村両氏の調査せる所と異なる所なし。震源に關しては大曲に置ける機械に依るにあらざれば其の方向距離の正確なることを了知し難きも、刈和野にて二三回の微震計により檢したる處、十七日余震の震源地は、刈和野より南方約一二里の間にあたり、地震の程度及び災害の中心に付ては大凡の見當付きたるか故に、従来の計画を改めて其の研究に従事すべく、或は円行寺行を止め、大正寺より強首方面を視察したる方適當なりしならん。尚地震の程度に付ては、研究の目的より云へは寧ろ物足らぬ位なれとも、尚多少の震動は今後ともなきにしもあらざるへし。終りに被害部落の雄物川沿岸地に多きは「スリップ」の關係より来りたるものにあらずして、是等の部落は人為的に耕地を河岸に向かて広め、其の上に家屋を建設したることに由る。

大正三年三月二十二日『新報』二面

○今村博士の意見―二十一日午前十時県庁着―

今回秋田県地方の大震に付いては、其震源及び震動の方向、家屋破壊の状態に至る迄数日間調査の結果に依るに、予が最初の予

想と相違なきものとす。即ち震源に付いては震災予防調査会に於て余が報告したる如く、明治二十九年陸羽大震の震源を拘括せる地弱線の延長線上にありて、北栖岡より由利郡大正寺村の南方に至る一線を今回地震の原動力の所在とすべきものとす。以上の断定に付いては大曲に於ける地動観測震度の分數等の外、地動の方向にも依りて推定したるものにして、即ち明治二十九年の場合の如く地動は略東西の方向を示せり。次に建築物に付ては、多数の家屋は頭部は重く、軸部の接続薄弱なりしは倒潰を招きたる主なる原因にして、木材は裂け易き杉材を用ひ、柄は比較的小さきは主なる欠点なり。是等の注意に付ては総て前述二十九年本県地方の震災の際、中村・曾根両博士が觀察したるものと全く同一なり。故に今後新築修繕の上の注意事項に付ては、震災予防調査会に於て其当時評議決定して、殊に本県に通知したる次第なりし。

佐々木の「大地震の記」と右の今村明恒関連の新聞記事を比較すると、今村は地震直後から震源地付近である大沢郷・布又付近を調査し「秋田仙北地震」は北栖岡から大正寺に至る断層地震であることを掴み、講演は新聞記者に語った内容を更に詳しく話していることが分かる。それゆえ、佐々木が「大地震の記」に聞き慣れない専門用語を書き留める事ができたのは、講演以前と以後の新聞記事を熟読した結果であると言えよう。

続いて「大地震の記」は、震源地附近の被災状況を記した内容となる。佐々木は今村講演の翌二十三日、実家のある平鹿郡田根森村（横手市）に帰省途中刈和野駅で下車し、震源地付近である北の目・寺館・大沢郷付近を訪れる。そこで佐々木は、負傷者の救助に当たる赤十字社の様子や、被災者の声を聞き詳細に記録している。その後彼は田根森村に帰るが、地震の被害を最小限に食い止めるため、実家の人達が仮小屋で暮らしていた様子を記している。佐々木は田から青砂が噴き出したことも書いているが、これは昨年起きた「東日本大震災」にお

いても随所に発生し、問題となった液状化現象であろう。

更に「大地震の記」を見ると、地震発生から四ヶ月経った八月、再び震源地を訪れ、布又を訪問していることが分かる。内容で興味深いのは、現地の人が道ばたでお茶や煎餅、そして出土した化石を売っていることで、それだけ震源地を訪れる人が多かったことを物語っている。

おわりに

本稿は人文展示室に常設展示されている『想出』から「大地震の記」の部分に翻刻し『秋田魁新報』の記事と突きあわせて検討を加えたものである。「大地震の記」の著者は、秋田師範学校生徒佐々木金一郎で、その構成は大正三年（一九一四）三月一五日の「秋田仙北地震」発生時の秋田師範学校寄宿舎内の様子、三月二二日に県公会堂で行われた今村明恒の講演内容、震源地付近探索の様子から成っている。この資料を「秋田仙北地震」研究の一資料として取り上げること、次の二つの知見を得ることができた。

その一つは「大地震の記」に書かれた内容は、地震発生時の寄宿舎内の様子や今村明恒の講演内容を含め従来知られていないものばかりであった点である。とりわけ、地震や被害に関する情報を佐々木は新聞から得、更に講演会へ出かけて専門家の見解を聞いたことは興味深い。これは佐々木だけ行動力が突出していたわけではなく、今村講演を報じた『秋田魁新報』三月二十三日の記事に「聴者堂内に溢れたり」とあることから、多くの秋田市民に共通した行動であると言えよう。

「大地震の記」から得られるもう一つの知見は「大地震の記」を書いた佐々木金一郎の感情の変化である。同書は、地震発生から約五ヶ月後に書かれたものである。地震発生時から直後にかけて、佐々木の感情は自らの死をも考えるほどの恐怖感にさいなまれていた。そして地震発生から時間が経つと、佐々木の感情は恐怖から地震発生メカ

ニズムへ変化し、今村講演へ参加するばかりでなく、講演翌日は震源地付近を見て歩いている。つまり恐怖感が旺盛な知識欲に変化しているのである。更に時間が経過するに従い、恐怖におののきながらもコミカルな行動を取った寄宿舎の仲間や裸で逃げた秋田市内の一人を回顧するようになる。これは恐怖感が薄れ心の余裕が出てきた証拠であろう。

佐々木金一郎は、地震発生から五ヶ月後、新聞記事の切り抜き、トレース、被災状況を撮影した絵はがき等を挿入して自らの体験を「大地震の記」を書いた。これを読むと、従来知られていなかった「秋田仙北地震」関連の出来事や、震災に対する佐々木の感情が分かるが、それ以上に、自身が体験した震災の記憶が風化しないうちに記録しなければならぬという強烈な使命感を感じる。ここに後年郷土史家として大成する、若き一九歳の秋田師範学校生徒佐々木金一郎の行動の特質がある。

以上「大地震の記」は、地震研究においても郷土史研究においても注目すべき資料であることを最後に強調し、ここで擧筆する。

〈翻刻について〉

- 1 文意に従って句読点を適宜つけた。
- 2 旧漢字は常用漢字に置き換えたが、意味の通る字についてはそのまま残したものである。
- 3 送りながや濁点については、原則的に原文のままとした。
- 4 明らかな誤字についても原文の通りとし（ママ）をつけた。
- 5 原本の空白部分は文字数にかかわらず「」で表記した。
- 6 絵はがき、新聞の切り抜き及びトレースした地図の画像は、編集の都合上、原本に挿入されている位置と若干異なる。

〈註〉

- 1 水田敏彦「一九一四・三・一五秋田仙北（強首）地震による震害に関する文献調査」（『日本建築学会技術報告集』第一四卷第二七号、二〇〇八年六月）、「一九一四・三・一五秋田仙北（強首）地震の被害分布に関する文献調査」（『日本建築学会技術報告集』第一五卷第二九号、二〇〇九年二月）
- 2 『秋田県震災の状況』秋田県、一九一四年
- 3 今村明恒「大正三年秋田県仙北郡大地震調査報文」（『震災予防調査会報告』八二、一九一五年）
- 4 宇佐見龍夫『新編日本被害地震総覧』東京大学出版会、一九八七年
- 5 『西仙北町郷土史 近代編』西仙北町郷土史編纂委員会、一九七一年
- 6 田口勝一郎「秋田地域史研究家・佐々木金一郎小伝」（『北方風土』五七、二〇〇九年一月）